

「戦争の話」

いつもは、おどけたお話で、説教の冒頭を柔らかくするのが、私のやり方なのですが、今日は、最初からちょっとシリアスな展開で参りたいと思います。

旧約聖書の創世記に遡る信仰の大先輩であるヤコブさん。熾烈な兄弟間の軋轢の先で、お兄さんとの対話を控えて、ヤボク川のほとりで重大な信仰体験をします。神様の使いと素手で戦い、格闘をして、ヤコブさんはこれを撃退します。その結果、ヤコブさんは、神様の使いに戦い、そして勝った者として「イスラエル」という名前を頂きます。この「イスラエル」という名前は、旧約聖書、新約聖書を通して、神様に特別に選ばれた国家を表す名前として語られ続けてきましたし、現代社会にあっても「イスラエル」は、少々扱いの異なる国の名前として機能しています。皮肉と言うか、いや、むしろ、だからこそと言うべきか。「イスラエル」という名前には、有史以来ずっと「戦い」という現実が付きまとっています。

日本に生きる私たち、ユダヤ教じゃなくてキリスト教を信じる私たちは、ニュースに取り上げられる「イスラエル」に関する報道を、あまり自分事としては受け止めません。私もそうです。遠くにあるユダヤ教の国が、世界秩序を無視して勝手に好きにやっているんだな、という捉え方をしています。でも、私は、旧約聖書を読む時、ふと止まってしまうんですよね。旧約聖書って、ユダヤ教の聖書で、イスラエルという名は、その国は、アブラハムさんとか、ダビデさんとか、ソロモンさんとか、イザヤさんとか、エゼキエルさんとか、私たちが大切にしている偉大な人たちと切っても切れないものだよねと。現代におけるイスラエルの問題は、確かに信仰的な、聖書的な問題はないでしょう。だから、キリスト教である私たち敦賀教会とは関係がないんだと言っても、きっと神様は怒ったりされないでしょう。でも、それでも思うのは、全世界に向けた宣教命令を承っている私たちが、身内と言っても過言じゃない、イスラエルの問題に無関心でいても良いのかな、ってことです。

もちろん、だからと言って、出来ることなんてないですよ。むしろ、変な正義感に駆られて、イ

スラエルへ渡航したいなんて人がいたら、私は全力で止めます。東京都千代田区にあるイスラエル大使館にデモ行進に行くという方に対しても、私は「心意気は買うけど、でもくれぐれも気を付けてね」と控えめに声を掛けると思います。私は、イスラエルを共通課題とした、パレスチナ、イランなど中東地域の争いについて、具体的な行動をしたいと思っているわけじゃありません。ただ、行動しないことと、無関心でいることは、全然違うと思います。少なくとも「祈る」ことを知っている私たちにあっては、行動しないと、無関心は、同じじゃないよね。

自分の限界、現実的なリスクを弁えて「行動しない」ことを選ぶけど、でも、決して「無関心ではない」「知って祈ることを忘れない」。その姿勢は、絶対に大切なことだと思います。もっとも世間の行動派の人たちの中には、「具体的な行動もせず、ただ祈るだけで一体何が変わる」と言う人もいるでしょう。もし、そんな人に、運悪く出会ったなら、私ならこう言います「私には、中東地域よりも大切なものがあるんだ、でも、中東地域の平和も捨てきれないんだ、そんな欲張りな私だから、ここで祈るんだ」と。

信仰共同体の大事なところは、祈りを合わせることで、その祈りが、個人の言葉と意思を超えて、現実作用する力に変換される可能性がある、ということです。それは、神様の御力があるからだし、でも、それだけじゃなくて、教会として祈りを合わせることで、それは集団との影響力を持つということでもあります。私一人だけが思っていることも、教会で一緒に心を合わす人がいてくれると思うと、少し力付けられるじゃないですか。そのわずかな変化は、無駄じゃありません。イスラエルに落ち着きを、パレスチナに平和を、そして、中東地域に安定した信仰と社会と人生を、と一人ではなく共同体で願うなら、それは一人で願うよりも、着実に力を持つものです。

だから、自分一人には力もないと諦める前に、知ることが大事です。自分の祈りは無駄じゃないと知り、その祈りは共感を呼ぶと知り、一人よりも二人が良いと知り。私たちが何故教会で共に集い、共に世界の平和を祈り、共にその世界を統べる神様の御言葉を聴いているのか。その意味を今一度、再確認して、主の肢として、平和の使者として遣わされていることを知っていたいと思います。

今日は、そういう諦めの悪い「知る」ことを止めない私たちだからこそ、知っておきたい「戦争」

について。聖書の御言葉に聴いてみたいと思います。

この聖書箇所、反面教師な教えがあれば良し。つまり、果敢に勇壮に戦って勝利を得たとして、結果的に被った不幸や損害が想像以上で、とてもじゃないが割に合わない、戦争の悲惨さと不合理を伝える純粋な非戦の道を行くのも良し。でも、それだけじゃなくとも、「戦う上での流儀」が知った上で……。知ったところで、戦士や兵士ではない私たちには、何もできないだろうけど、でも、「戦う上での流儀」を私たちが知って、学んで、その知見に基づいて、世界を再び見渡した先で……。私たちは、この世界に対して、また違った捉え方、問題提起、違和感、憤りの感じ方が見つかるかも知れません。

今日の聖書箇所に書かれているのは、古代ユダヤ教、古代イスラエルの戦争の流儀のお話です。「戦争する時には、こうしなさいよ」という教えの御言葉です。そもそも「戦争なんてするよな」と言いたくなるのが、私たちキリスト者ですが、良くも悪くも、旧約聖書は、そういう現代のキリスト者の願いに寄り添ってはくれません。ただ、今日の聖書箇所を読んでみて、すぐに分かるのは、戦士や兵士として従う者に対して、かなり優しいということです。しかし、まず断っておきますが、だからと言って、現代のイスラエルの臨戦態勢が「優しい」と言いたいわけではありません。むしろ逆で、ユダヤ教の聖書を受け継ぐキリスト教の立場から、「戦う上での流儀」を再確認したいと思います。……結論を言ってしまうと、神様の御計画を信じつつ「万一」と言ってしまう、人間の感情を、この世界は知っているのか、ということです。

今日の聖書箇所では、3～4節において「心ひるむな。恐れるな。慌てるな。……うろたえるな。あなたたちの神、主が共に進み、……勝利を賜るからである」と書かれています。これは、万軍の主が力強い味方として、恐れるものを知らぬ最強の軍団を整える御言葉として聴くことができます。なんの心配も要らない、なんなら楽勝で、戦いの結末を見ることができるだろうという信仰と確信が込められています。

しかし、5節以降の「勧め」の言葉は、その楽勝を前提とした楽観的な見通しとは違い、「万一」という言葉を沢山用いる、慎重な言い回しとなっています。5節にある「新しい家を建てた者」、6節にある「ぶどう畑を作ったけど、まだ収穫していない者」、7節にある「婚約したけど、夫婦の喜

びを味わっていない者」など。これらの箇所で、「万一」と訳されている言葉は、もともとのヘブライ語では、「望ましくない結果への心配と、それを避けるための準備」という意味を持っています。これは、つまり神様の導きによって戦争を仕掛けるにしても、そこには望ましくない死が待っている、ということを認めているんですね。いくら神様に守られていると信じてでも、でも、死んでしまうことがあるから、注意して欲しい、という。

この聖書箇所は、主の御名による戦争を肯定しているのではなく、あくまで、戦争の悲惨さ、無情さ、無慈悲な結果を恐れているということです。勇猛果敢な戦士や兵士の姿ではなく、大切なものがあるが故に戦うことを躊躇うという非常に人間的な姿がここには描かれています。そのことを弁えた上で、なお戦争することの意義について、この世界はもっと知るべきでしょう。そして、「私には、大切なものがあるから、戦うことを選ばない」という意識を、世界中で共有できれば良いのに、と思います。施政者は、自国民を大切に思うが故に、戦争を避けることを選ぶべきだと私は思います。私が思ったところで無力ではありますが、その祈りが神さまに届くと信じて、考えることを止めないでいたいと思います。私たち一人ひとりが、戦争のもたらす無慈悲な、主の御心ではない結末があることを知って、祈り、学び、言葉にすることを続けて参りましょう。私たちから始まる平和の実現を願いつつ、最後にお祈りを致します。

神様。

今日も私たちのために、尊い安息日を備えてくださり、感謝致します。しかし、世界を見渡せば、全く安息は異なる今日を過ごしている人々がいます。宗教を根拠とした争いの日々を過ごしている人々もいます。どうか、神様。人の造り出した理や仕組みを超えて、あなたによる全き平和が、早く実現しますように。大切なものを守るために、戦わない、という選択が常に残されていることを知って、世界が戦争を選ばなくなりますように、切に祈ります。知ること、学ぶこと、そして祈ることから始まる、平和の実現があることを信じつつ。このお祈りを、平和の主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。